

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）有志による

# 次のパンデミックに向けた 報道とコミュニケーション提言

2024年12月例会で尾身茂さんとやりとりしたことを踏まえ、有志メンバーで次のパンデミックに向けた報道とコミュニケーションのあり方について議論し、提言をまとめました。



2024年 **12**月例会

2024 科学ジャーナリスト賞受賞作  
「1100日間の葛藤 新型コロナパンデミック専門家たちの記録」  
を手がかりに、尾身茂さんから聞く

**尾身 茂**さん

元政府コロナウイルス感染症対策分科会会長

2024年 **12**月 **23**日(月) **18:30** ~ **20:30**



# 提言サマリー

## ▶ 提言 1：スポークスパーソンの必要性

尾身さんのようなスポークスパーソンは必要で、政府が責任をもって養成して即応できるようにしておくべきだ。

## ▶ 提言 2：政策決定の経過公開

政府・専門家は議論の過程をオープンに説明すべきだ。COVID-19パンデミックの対応について本格的な検証作業に取り組むべきだ。

## ▶ 提言 3：政治家の役割と責任

政治家は「決める」だけでなく「理由を説明する」責任も負う。パンデミックの際は「情報の不確実さの程度」も伝えるようにする一方、国民は不確実さについて理解しよう。

## ▶ 提言 4：報道陣の責任

今回の報道の仕方を省みるとともに海外事例を集めて分析し、メディアは自律的に「パンデミック時の報道の手引き」をつくるべきだ。

## 提言 1 :

尾身さんのような役割を果たす人が常に必要である。

- ▶ パンデミックのときは、専門的知識と行政能力を兼ね備えた「スポークスパーソン」が必要。
- ▶ 2025年に新たにできた国立健康危機管理研究機構が、こうした人材を養成し、その人が危機の時のスポークスパーソンになるべき。
- ▶ 2023年に内閣官房に設置された感染症危機管理庁が危機の際の広報主体となるのなら、スポークスパーソンの養成・登用の具体的方法を平常時に詰めておき、いつでも非常態勢をとれるようにすべき。
- ▶ 感情に配慮した伝達が重要なので、リスクコミュニケーションの専門家との協働を。
- ▶ 自治体レベルでの人材育成・ネットワーク構築も進めるべき。

## 提言2： 政府・専門家は議論の過程をできる限りオープンに しなければならない。

- ▶ 国民生活に重大な影響を及ぼす政策は、議論の過程をオープンにし、決定理由を説明しなければならない。
- ▶ 政府の「新型コロナウイルス感染症対応に関する有識者会議」は2022年6月に報告書を発表したか、わずか1カ月程度でまとめられたものだった。
- ▶ 英国では、2023年6月から元判事を長とする独立調査委員会が組織され、公聴会が3年がかりの予定で開かれている。日本も、コロナ対応に関する本格的な検証をすべきだ。

### 提言3：

政権中枢を担う政治家は、政治家と専門家の役割を理解し、それを踏まえて政治家としての責任を果たすべきである。

- ▶ 「専門家は政府に科学的助言をするが、決定はしない」「決定するのは政府。科学的助言を受け入れない場合はその理由を説明する」という役割分担を踏まえてそれぞれが行動すべき。
- ▶ 関係省庁、自治体、専門家たちの連携がスムーズに進むようにするのは政治家の責任。
- ▶ 時間とともに状況が変わるのは当然であることを国民も理解し、「言うことが変わる」ことを非難しない。
- ▶ 情報発信の際は「不確実さの程度」も伝えるのが望ましい。

## 提言4：

メディアは今回の反省を踏まえ、自律的に次のパンデミックの際の「手引き」をつくるべきである。

- ▶ 「専門家」と「政治家」を対立構図に押し込む報道が多かったことには反省が必要。
- ▶ 「煽りすぎだったのか」という問いを記者自身も持ったが、答えは難しい。
- ▶ 記憶が風化しないうちに課題を抽出し、同時に海外の報道事例を集めて分析し、自律的に「パンデミックが起きたときの報道の手引き」の策定を。

# 付録

- ▶ 今回の情報伝達状況は①専門家の発する情報をマスメディアが詳しく伝えた第一期②その情報が若者に届いていないことがわかり、専門家がSNS発信を始めた第二期③情報発信が百家争鳴状態となった第三期、と分けることができる。
- ▶ パンデミック中は、治療薬やワクチン、マスクなどをめぐり、さまざまな情報が飛び交い、混乱した。その具体例の一つとしてPCR検査問題を振り返ると、国論を二分する騒ぎになったが、専門家たちが打ち出した「検査戦略」はあまり報道されず、社会に浸透しなかった。理由の一つは社会の関心が高かった「GO TO トラベル事業」に対する提言と同日に発表されたこと、二つ目としてもともと検査の基礎知識が社会に不足していたこと、などが挙げられる。